

■■■ aij 特別研究の対外的評価と今後 22.05.27

人為的要因による自然災害の防止に向けての技術・社会に関する特別研究委員会(第二次)

▲ 年度末に学会にて最終報告を行ったところ、本研究に多くの意見をいただきました。意見は大別すると三つに分けられます。第一は本研究の意義を高く評価いただく意見、第二は本研究のテーマを支える具体的研究の扱いに関する意見、第三は今後に向けての社会への働きかけに期待する意見です。いずれについても、本研究を積極的に評価いただいたゆえの激励であり、皆さま方のご期待に応えたく存じます。ここでは、三つのご質問を総括的に捉えて、本研究の研究姿勢が皆様方の意見に応えていることを示し、次への備えを着々と整えていくことを表明しておきます。

▲本委の姿勢；最近の防災研究では災害の複合性や社会変容に対応すべく、関連する種々の工学分野のみならず社会科学系との連携も必要として、研究の枠は以前に比べて飛躍的に拡大した。もちろん本委では、そうした動きは当然受け継ぎ、かつ森と樹木に例えるなら「樹木は森をつくり、森は樹木を育む」といったように、最初から社会全体を設定して社会全体からの視点で災害を見た。この方が社会を余す所なく俯瞰でき、また市民の受け止め方も格段に充実し、社会の成熟化への道が開くと捉えられた。こうして本委の骨子「防災イコール社会の健全化」、「社会づくり」の考えが自然発生したのである。

▲本姿勢による展開；姿勢の展開には、第一段階として種々の分野を可能な限り取り込んで、いわゆる森づくりを狙い、「森」の充実を図るとともに、第二段階として「森」から個々へのフィードバックを図るとした。実際には、第一段階と第二段階を何度も往來することによって最終的な本テーマの構成(森づくり)が以下のように練り上げた。

(a)姿勢の骨子

- ・多岐多様な分野を多岐多様なままに、
- ・俯瞰と深堀とで、
- ・社会と市民に着目し、
- ・人間育成や理想追及の思考で。

(b)対象の5系統化

- ・災害・復興
- ・社会システム
- ・市民活動
- ・教育・哲学
- ・包括(日本立て直し)

なお、個々の研究については、基本姿勢を背景に、各分野の研究(著者 26 人、論文 36 編、総頁 159)があり、これらの研究で全体を積み上げた。ただし、全体の研究については、個々の研究を大いに俯瞰できるよう全体構成に関連させていることを付記しておく。

▲研究の公表、社会への働きかけ；これには、「森と樹木」の例えのように構想を念頭におい

て、個々の研究も含めて社会への発信とするとともに、受け手側を専門家と市民に分けて対応とした。

専門家に対しては、21年9月の大会研究集会では個別研究からの全体への積み上げを中心に、22年3月研究報告会では全体構想を中心に、そして最後には研究の一部始終をまとめて報告書とした。この他、公開シンポジウムの開催はやり残したが、委員会としてでなく各委員の個別研究が論文に姿を変えて社会向けに公表されるのはこれからである。

一方、市民への取り組みについては、地域における街づくり場やコミュニケーション場にて実施が予定され、実際に着手されている。

▲連携や協働、委員会レベルにて；これについて本委では、組織全体での連携に加えて個人連携が有効と考え、個人レベルでの委員会複数在籍の推奨と共に、地球環境委員会の二つのWGとは進行役の招聘や勉強会共同開催が実に有意義であったことを確認した。

▲今後について；本委終了以降、任意のグループとして研究の火種を保持するが如く細々と活動を続けることにして、さしあたり本委の成果を広く公表し、他の関係委員会とは個人レベルで火種づくりを推進し、本業の研究を進めていく所存である。具体的には、本委の活動のうちの2-3トピックス研究の紹介として、今年秋頃に大々的なシンポジウムを企画したい。また、市民への働きかけとして、実務者討議の集いや朝活や街中カフェといった市民レベルのコミュニケーション場を大いに活用したい。なお、この動きはすでに地方都市にて始まっている。